

# 市内の藁蛇行事

「安行原の蛇造り」「木曾呂の注連張り」の他にも、市内には藁で蛇を造る行事があります。また、現在では途絶えてしまったと伝えられる行事もあります。かつてはもっと多くの藁蛇行事が行なわれていたのかもしれませんが。

## 1 現在も行なわれている行事

### 蛇造り (東貝塚・若宮八幡神社)

安行原の東隣、東貝塚でも藁蛇を造る行事が行なわれています。毎年7月14日に、若宮八幡神社の境内で、元の貝塚村から続く家(現在は11軒)の人々によって藁の蛇が造られ、社殿の前に設けた木の台に備え付けられます。大きさは2メートル程で、安行原の蛇に比べると小型ですが、やはり「へび」ではなく「じゃ」と呼ばれています。形状も通常の蛇とは違い、眼が3つ、鼻の穴が3つ、顎は上顎と下顎が2つずつあり、髭もあります。なぜこれを造るか、いつから始められたかといったことは何も伝わってはいません。しかし、やはり村を守るためだろうと考えられており、また、ずっと続けられてきたことや、皆の親睦を深めることにもなるということで今も毎年続けているといえます。蛇は、今は社殿の前に鳥居状の木のを台を設けて乗せていますが、かつては木に渡していました。一年間そのまま安置され、次の年に新しい蛇を造る前に燃やします。



東貝塚の蛇



蛇の頭部

## 2 現在は行なわれていない行事

### 蛇造り (安行・氷川神社)

安行原の北隣、安行でも蛇造りが行なわれていたと伝えられています。明治の末頃まで、毎年7月15日に安行氷川神社の境内にある浅間様に御神酒を添える時、蛇造りを行い、鳥居にかけていました。

### 綱より (青木・氷川神社)

芝川右岸にある青木の氷川神社で、昭和15年頃まで氏子の字宮前の人々によって「綱より」という行事が行なわれていたと伝えられています。2月8日の朝、皆で持ち寄った藁で長さ10mほどの大蛇を造り、氷川神社の鳥居にかけていました。